

静脈業界を牽引するリーダー：碓 隆司

第6回 ESJとの出会い



ESJとの出会いはその設立前に遡る。当社が収集運搬の許可を取得した時のガイダンスで、東京都産業廃棄物協会（現・東京都産業資源循環協会）への入会案内があり、そこで東亜オイル興業所（現・TOAシンプル）^{せき}の碩孝光さんとお会った。

その時、東京都産業廃棄物協会青年部の部長だった碩さんから「青年部に入りなさい」と言われ、当時の私は37～8歳くらいだったこともあり、一緒に青年部の活動をさせていただくようになった。各地にある施設の見学会や行政との話し合いの他、青年部としてお台場のクリーンアップ大作戦にも参加させていただいた。

出会った当時の碩さんは40歳くらいで、熊本特有のスタイルというか恰幅の良い風貌にパンチパーマで、とても堅気の人には見えなかったが、話をしてみるとその実、例えていうならば日本のファザーテレサもしくは産廃業界の不動明王だった。碩さんはいつも「10年後にはこうしたい」とビジョンを語り、堂々と日本全国を回り行動していくので、私は金魚のフンのように一緒について行き多くのことを学ばせていただいた。

よく碩さんが言っていたのは「産廃処理は日本全国、沖縄から北海道まで同一適正処理でもなく、料金も同じではない」という統一性がないことの問題意識である。

例えば、ものすごく高額なのに雑な処理の仕方をする事業者もあれば、もっと酷い例でいえば委託契約では秋田で処理を行っているはずなのにその間の途中で廃棄物が降ろされてしまっていることもあった。そして不法投棄・不法輸出も多く起きていた。

産業廃棄物による不適正処理事例としては、1990年に起きた香川県での豊島事件が非常に有名である。またその後、青森・岩手の県境にある27haという広大な土地で、国内最大規模の産業廃棄物不法投棄が発見された事件もあった。

こういった事件の印象により、産業廃棄物処理業に関して一般市民からは、ブラックな反社会勢力の資金源のような見られ方をしていた、という認識がある。

処理費や処理方法に統一性がないなどのグレーな仕事を、一般市民から見ても安心できる真っ白な統一性のある取り組みにするため碩さんが立ち上がり、まず青年部の全国組織づくりに動き出した。沖縄、宮崎、福岡など青年部のないところには組織づくりを手伝っていった。そういう志や碩さんの想いに賛同する各47都道府県の青年部で、2代目3代目と共感していただいた方々が手を上げて、全国産業廃棄物協会青年部協議会が設立された。

全国青年部では想いだけではなく現実的に「収集運搬の心がけ、安全な作業のための技術、効率良く環境に負荷をかけない引き取りの仕方」等の研修とテストを実施。産業廃棄物に関する基準づくりに心血を注いできた。

その後、廃棄物処理業界は法改正に伴い、作業をするだけでなく、きちんと説明することも求められるようになっていった。仕事の大枠をただ話せるだけでなく、内容を具体的に説明し、実際に行うことができる会社や人材をつくり上げるためには継続的な育成と支援が必要で、全国青年部のネットワークを株式会社として組織化する案が出た。

碩さんと一緒にやろうと、白井グループの白井徹さんや株式会社浜田の濱田篤介さん、そして当社も出資させていただき、他にも志に共感した会社が出資して全国青年部メンバーが中心となってできたのが、エコスタッフ・ジャパン（命名は白井さん）である。

ESJでは、会社の在り方やビジネスのヒント、作業の効率化、スキル・クオリティの向上、法令等の守るべきものなどを、設立当初から細田衛士先生がご指導くださり、見守っていただきながら形づくってきた。当社も社員研修をはじめ、多くのご支援をいただき感謝している。

循環型社会、そして持続可能な世の中にするためには、今後さらにESJの活動が必要不可欠だと思っている。

次回、最終稿は碩さんから聞いた未来の循環型社会の在り方について語り合った思い出も交えて書こうと思う。

【続く】



著者
株式会社アンカーネットワークサービス
代表取締役 CEO

碓 隆司



千葉青年部
30周年記念祝賀会
での演奏